

菊池市における地域住民の水辺 に対する意識に関する研究

田中 尚人¹・光永 和可²

¹正会員 熊本大学准教授 大学院先端科学研究部 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1)

E-mail: naotot@kumamoto-u.ac.jp (Corresponding Author)

²正会員 佐賀県税事務所課税第二課 (〒849-0925 佐賀市八丁畷町 8-1)

E-mail: mitsunaga-nodoka@pref.saga.lg.jp

かつて水辺では、地域住民は洗濯や川遊び等日常的に活動していた。それぞれの水辺には地域固有のコミュニティが存在していた。しかし近年、人々が水辺を訪れる機会は減少し「良い子は川で遊ばない」が一般化している。本研究の目的は、水辺の様々な活動を正しく行うための示唆を得るために、地域住民の水辺に対する意識を明らかにすることである。本研究では、かわまちづくり活動が盛んな熊本県菊池川流域を対象地に選び、菊池市の4地区の水辺においてインタビュー調査を行い、水辺の風景と川遊びの関係性、川遊び等のローカルルールについて分析した。研究の結果、戦後から現代に至るまで、菊池川における水辺の日常的な風景、川遊びの場所や内容、ローカルルール、地域住民の川に対する危機意識が変化してきたことが分かった。

Key Words: civic pride, experiences, local rules, playing, waterfront

1. はじめに

(1) 研究の背景

1940年代頃、人々は炊事や洗濯などの家事を川や井手で行ってた。また、現代のように遊び道具があまり無かったため、子どもたちは夏になると毎日のように川へ遊びに行った。このように、かつて水辺では地域住民による日常的な活動が行われており、それぞれの水辺には地域固有のコミュニティが存在した。

大熊¹⁾は「近世、水辺の住人たちは川との様々な付き合いの中で、水防や魚のとりかた等、川に関する技術を各々が所有しており」と、かつて川での自治は、地域住民が各々に持つ知識や知恵、技術などを共有し、協力しながら行っていたことを述べている。つまり、かつて水辺には、地域固有の規範であるローカルルールが存在し、そのもとに様々な日常的な活動が行われていたことが推測できる。

しかし今日、社会的要因や自然環境の変化に伴い、以前のように人々が水辺空間に近寄る機会が減ってきた。人と水辺との関わり合いの希薄化は日本全国で問題視されており、それに対し近年、水辺の賑わいを創出するため、川づくりとまちづくりを一緒に実践するかわまちづ

くり活動や、水辺の活用方法を官民一体で検討しようとするミズベリングなどの活動が全国に広まってきている。

今後、これらの活動を通して河川整備を検討していく際には、公民や地域住民が一体となり、持続可能な整備を行っていく必要がある。そこで、今後の河川整備検討の一知見を得るため、かつて地域住民が、地域の水辺に対してどのような認識を持ち、水辺と関わってきたのかを明らかにする必要があると考えた。

(2) 既往研究

a) 日本の水辺における日常生活の変化

水辺における人々の生活に関する研究に宇井ら²⁾の研究がある。彼らは、自然環境や生物生息状況の変遷と地域住民の日常生活における行動から、都市化に伴った自然の変化が人間生活に与える影響について明らかにした。また嶽山ら³⁾は、遊び場という空間に着目し、その変化を捉えることで、現代の川遊び活動発展への一知見を得た。さらに和田ら⁴⁾は、住民へのアンケートから利用者が望む水辺環境に必要な構成要因を明らかにした。いずれの既往研究も、環境的要素に着目して人と自然との関わりを深く考察している点や、地域住民の水辺利用のニーズを細かに分析している点において優れている。しか

し、実際に水辺の賑わいを創出する地域住民の水辺に対する認識の変化に着目し、日常生活との関係性を研究したものは少ない。

b) 原風景にみる水辺の活動

呉⁹⁾は「原風景は、多様な素材や主体で構成されているストーリー・物語として日常生活の中に現れる」と述べている。川遊びをしてきた人々は、大人になっても、当時の水辺を体験を含めて、原風景として捉えているのではないかと考えた。

既往研究として、佐竹ら⁹⁾は原風景について文献調査とヒアリング調査から、時代ごとに地域の空間的・社会的条件を把握し、多様な水辺において属性が異なる人々がどのように水辺の愛着を形成するのかを、個人の体験に基づいて明らかにした。彼らの研究は、「海」「池」「川」などの多様な水辺に着目している点や、人々の属性に着目して愛着の度合いを深く考察している点に関して優れている。また、仙田ら⁷⁾は、大人たちが持つ原風景から、子どもにとって良いあそび場の条件を、空間の持つ特性に着目して分析している。彼らの研究は、様々な地域で網羅的に調査を行っている点や、個人へのインタビューを面談形式で行い、分厚い記述を行っている。しかし、地域住民が語る水辺の原風景から、その地域固有の水辺に対する人々の認識を考察したものは少ない。

c) 水辺におけるローカルルール

既往研究として、中嶋・田中ら⁹⁾の研究がある。彼らは、古くから固有の水辺環境を持つ地域において、地域コミュニティの維持要因を、空間的要素も取り入れながら丁寧に分析しローカルルールとして明らかにした。しかし、水辺における日常的な生活や諸活動に着目して、ローカルルールを明らかにした研究は多くない。

(3) 研究の目的と特徴

本研究の目的は、水辺における日常的な活動に着目し、地域住民の水辺に対する意識を明らかにすることである。本研究の特徴は、以下の三つである。一つ目は、水辺の風景に着目し、水辺に対する認識の変化を地域住民の持つ原風景から明らかにした点である。二つ目は、地域による人々の水辺に対する認識の違いをみるため、条件の異なる流域4地区にて、川遊びとそのローカルルールに関する調査を行った点である。三つ目は、それらの調査を三世代を対象に行うことで、各コミュニティの水辺に対する認識の変遷を明らかにした点である。

(4) 研究の構成

本論文の構成は以下の通りである。2章にて対象地の概要と調査手法について整理した。3章にて、地域住民が抱く菊池市の水辺に対する地域住民のイメージを分析した。4章では菊池市民の川遊びの変遷を整理すること

で、水辺における諸活動の変化を分析した。5章では川遊びにおけるローカルルールに着目し、地域に根付く水辺に関する規範の変遷と変遷要因を明らかにした。

2. 研究手法

(1) 研究対象地の概要

a) 菊池川流域及び菊池市の概要

研究対象地である菊池市は、熊本県の北西部に位置し令和2年10月の国勢調査では人口46,416人、世帯17,593世帯となっている⁹⁾。菊池市を流れる菊池川は、熊本県阿蘇市深葉を水源として、迫間川、合志川、岩野川などを合わせながら菊鹿盆地を貫流し、玉名平野に出て木葉川、繁根木を合わせ有明海に注ぐ一級河川である。幹川流路延長は71km、流路面積は996km²、山地が約70%、農地が約26%、宅地が約4%を占める。菊池川流域は上流部に菊池市、中流部に山鹿市、下流部に和水町、玉名市といった4つの主要都市を有している。沿川は、九州縦貫自動車道をはじめ、国道3号、国道208号、JR鹿児島本線等の基幹となる交通施設に加え、2011年3月に九州新幹線が開通し、交通の要衝となっている。図-1にて熊本県菊池市の概要と、菊池市内における流域の概要を示す。黒枠で示している地域が菊池市である。

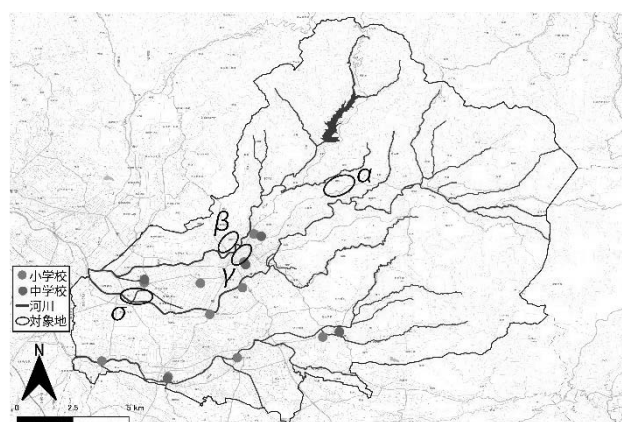


図-1 菊池川流域と菊池市の概要

菊池市史や国土交通省の資料など¹⁰⁻¹⁶⁾を参考に、菊池川流域と菊池市の年表を作成した(表-1)。菊池川流域は現在に至るまで多くの洪水に見舞われ、そのたびに甚大な被害を受けていた。そこで菊池川支流迫間川の上流部に位置する龍門地区にダムが検討され、2001年(平成13年)に竜門ダムが完成し、現在の河道となった。

また、菊池川流域では米作りの歴史が長く、「米作り、二千年にわたる大地の記憶～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～」¹⁷⁾というタイトルで、2017年に文化庁が定める日本遺産として認定された。日本遺産の登録も一つのきっかけとなり、菊池川流域の市町村では、今日かわま

ちづくりをはじめとする様々な水辺活動が盛んになり、菊池市においても、2019年度からかわまちづくりが事業課された。

表-1 菊池川流域及び菊池市の歴史

西暦(年)	和暦(年)	菊池川流域における出来事	菊池市における出来事
1941	昭和16	菊池川流域洪水(梅雨性)	
1946	昭和21	菊池川流域洪水(梅雨性)	
1949	昭和24	菊池川流域洪水(台風)	
1953	昭和28	菊池川流域洪水(梅雨性、六・二六大水害)	
1954	昭和29	菊池川流域洪水(梅雨性)	
1955	昭和30		
1956	昭和31		
1962	昭和37	菊池川流域洪水(梅雨性)	
1963	昭和38	菊池川流域洪水(台風)	
1964	昭和39	竜門ダム予備調査開始(建設省菊池川河川事務所)	
1965	昭和40	菊池川流域洪水(梅雨性)	
1968	昭和43		
1969	昭和44	菊池川流域洪水(梅雨性)	
1970	昭和45		
1971	昭和46	菊池川流域大雨洪水	
1972	昭和47	菊池川流域大雨洪水	
1974	昭和49	菊池川上流大雨洪水	
1978	昭和53		
1979	昭和54	菊池川流域大雨洪水	
1980	昭和55	菊池川流域洪水(7月梅雨性)(8月台風)	
1982	昭和57	菊池川流域洪水(梅雨性)最大な被害	
1987	昭和62	竜門ダム本体工事着工	
1989	平成元年	菊池川流域洪水(寒冷前線)	
1990	平成2年	菊池川流域洪水(梅雨性)最大な被害(竜門ダム定礎式)	
1993	平成5年	菊池川流域洪水(梅雨性)	
1997	平成9年	菊池川流域洪水(梅雨性)	
1999	平成11年	菊池川流域洪水(低気圧)	
2002	平成14年	竜門ダム建設完了	
2005	平成17年		
2006	平成18年	菊池川流域洪水(梅雨性)	
2009	平成21年	菊池川流域洪水(梅雨性)	
2012	平成24年	菊池川流域洪水(梅雨性)	
2017	平成29年	菊池川流域が日本遺産に登録	

b) 調査対象地4地区における水辺の概要

調査対象地として、図-1に示した流域4地区(α~σ)の水辺の概要を示す。

(α) 重味地区は、菊池川本川の最上流部に位置している。周囲を山々に囲まれ、川中には大きな岩が多く見られる。地区内にある産さん滝(図-2)や千畳河原は観光名所として知られ、夏場には多くの人々が訪れる。

(β) 玉祥寺地区は、菊池川支流迫間川の upstream 右岸に位置している。迫間川には、菊池川水系唯一の2001年に完成した竜門ダムが、玉祥寺地区では毎年7月21日に「かわまつり」と呼ばれる神事が行われており、水害や水難に対して安全祈願をする今でも残っている。

(γ) 隈府地区は、玉祥寺地区の対岸(迫間川上流部左岸)に位置しており、中世以来菊池氏の居城や1950年代以降温泉街として栄えてきた菊池市の中心市街地である。築地井手や新堀井手などの井手(農業用水路)が多く存在し、都市的な水利が随所にみられる。

(σ) 七城町菰入地区は、菊池川本川中流部右岸に位置している。1940年代から河川整備が行われ、最近では鴨川河畔公園(図-3)が整備され、夏場には多くの子どもたちが水辺で遊ぶ姿を見かける。



図-2 産さん滝



図-3 鴨川河畔公園

(2) 調査手法

a) グループインタビュー調査

本調査では、地域住民の水辺に対する、時代ごと、地区ごとの認識を、①地域住民の持つ水辺のイメージ、②川遊び活動の変遷、③ローカルルールの変遷、に着目して明らかにした。そのため、各地区や各時代のコミュニティで共有されていた水辺における集団行動や、水辺に対する共通認識を捉える必要がある。よって本研究では、渡辺ら¹⁸⁾が「集団に共有された経験や知識が語られる傾向がある」と提唱するグループインタビュー手法を選択した。また呉⁵⁾は、共同語りと個人の語りの異なる点として、以下の3点を挙げている。

[1] 個人の語りの場合は語り手の自らの連想を自由に広げるが、共同語りは複数人での語りになるため、自由意思で話題を変えるだけでなく、他の語り手によって話題が変わったり、広げられたりする点

[2] お互い同じ経験をしたことを知った場合は互いに確認したり、知らない場合は質問したりするような、個人語りにはないやりとりがある点

[3] 複数人が同時に発話したり、同時に同じ反応をしたりする点

b) 4地区における調査概要

以下に示した項目に提示して、表-2に示した4地区の調査対象者に対してグループインタビューを行った。4地区での統一性を図るため、対象者全員に共通して、遊びの種類、方法、場所、時代、教わった人の5Wについて漏れがないように質問し、自由に話して頂いた。

- 問1：子どもの頃に行った川遊びについて
- 問2：川遊びをする際のルールや取り決めについて
- 問3：一番思い出に残っている水辺の風景について

表-2 4地区におけるインタビュー対象者

対象地	α. 重味地区	β. 玉祥寺地区	γ. 隈府地区	σ. 七城町菰入地区	
日程	2019/12/14	2019/12/3	2019/12/9	2019/12/8	
対象者	α1(83) α2(78) α3(71) α4(65) α5(60)女性 α6(58) α7(43) α8(36)	β1(86) β2(81)女性 β3(69) β4(39)	γ1(85) γ2(71) γ3(70) γ4(68) γ5(54)女性	グループ1 σ1(85) σ2(83) σ3(82)	グループ2 σ4(76) σ5(67) σ6(66) σ7(63) σ8(60)
	計8名	計4名	計5名	計3名 個別:σ9(48)	計5名 計1名 計9名

3. 菊池市の水辺に対するイメージの分析

水辺の風景に着目し、地域住民が水辺に対して抱くイメージを分析した。まず、菊池市立の全小中学校15校の校歌から、地域住民が川に対して抱くイメージを分析した。次に、水辺の古写真を用いて、風景の変化とその要因を分析した。最後に4地区で行ったインタビュー調査から、水辺に関する思い出の風景を明らかにした。

(1) 校歌にみる水辺のイメージに関する分析

菊池市立の全小中学校 15 校の校歌から、人々が菊池川に対して持つイメージを明らかにした。

a) 調査手法

汐見ら¹⁹⁾は、滋賀県の小・中学校校歌から、地域のイメージ形成に関連する具体的な要素を抽出し、社会的背景と共にその変化を明らかにした。その中で「校歌はその地域の作成された時代にその地域の人々にとって『好ましい』像を謳う。したがって、そのイメージは各資源あるいは地域の理想像である」と述べている。

b) 菊池市の小中学校校歌の分析

菊池市立の全小中学校 15 校の校歌から川に関する歌詞のフレーズを抽出し、人々が菊池川に対して抱いているイメージについて考察した。表-3 に 15 校の校歌の概要を示し、図-4 に抽出した川に関するフレーズを抜粋した（菊池市立小中学校 HP²⁰⁾より引用）。

表-3 菊池市立小中学校の校歌

学校名	所在地	設立	校名の改名	校歌の作詞家	校歌の制定
1 菊池市立泗水小学校	泗水町	1874年	1955年	山口白陽	1955年
2 菊池市立泗水西小学校	泗水町	1874年	1961年	春田明	改名年
3 菊池市立隈府小学校	隈府	1874年	1958年	島田智也	1955年
4 菊池市立戸崎小学校	赤星	1885年	1958年	竹下白峰	1955年
5 菊池市立花房小学校	出田	1881年	1946年	村上信子	改名年
6 菊池市立泗水東小学校	泗水町	1874年	1961年	不明	改名年
7 菊池市立七城小学校	七城町	不明	1966年	不明	改名年
8 菊池市立旭志小学校	旭志	1873年	1966年	森テイコ	改名年
9 菊池市立菊之池小学校	西寺	1874年	1947年	渡辺恵	1964年
10 菊池市立菊池北小学校	隈府	1993年	1993年	堀川喜八郎	1993年
11 菊池市立泗水中学校	泗水町	1947年	1955年	瀬古確, 津下正章	改名年
12 菊池市立菊池北中学校	隈府	1968年	2000年	大槻幹雄	改名年
13 菊池市立七城中学校	七城町	1947年	1954年	山口白陽	1951年
14 菊池市立菊池南中学校	隈府	1947年	1968年	山口白陽	改名年
15 菊池市立旭志中学校	旭志	1947年	1956年	不明	改名年



図4 菊池市立小中学校校歌にみる水辺のイメージ

校歌の分析により、以下のことが明らかになった。

- ・ 14/15 校の校歌に「菊池川」の語句が含まれていた。
- ・ 頻出語として「清い」が 10 件、「実り豊か」など豊作の意味と「歴史が長い」を示すフレーズが、それぞれ 5 件ずつ抽出された。

校歌の分析より、歴史的な価値を有し、生業を支える基盤としての菊池川が意識されていることが分かった。

(2) 古写真にみる水辺の風景の変化に関する分析

菊池川に関する古写真を収集し、現在の同位置における写真との比較分析を行い、菊池市の水辺における風景の変遷とその要因を明らかにした。

a) 調査手法

平岡ら²¹⁾は、主に高度成長期以前に撮影された写真を用いて、被写体及び撮影地点の双方を対象として、同一位置で現在の風景と比較分析し、人と川との関わりの転換点とされる昭和30年~40年代以降の変容を、景観の構成要素に視点を当てて、変容の内容や程度を検証した。

本節では、彼らの研究を参考に、菊池市の水辺の古写真を収集し、風景の変化について考察した。

b) 川に関する古写真の整理

古写真の収集をするにあたり、菊池市立中央図書館のデジタルアーカイブをはじめとする資料²²⁾を用いた。また地域住民の皆様にも川に関する古写真を提供して頂き、撮影場所が分かる写真が17枚(表-4)収集できた。

表-4 収集した菊池市における古写真の概要

番号	タイトル	場所	撮影日時	被写体	備考
1	大水害で流した戸崎の今村橋	隈府	1941年	川, 橋	災害
2	切明区の塩塚観堂前の築地井手	隈府	1950年代	井手, 人	
3	切明区の中央病院付近の築地井手	隈府	1950年代	井手	
4	菊池「笹乃家」前の築地井手にて洗濯をする	隈府	1950年代	井手, 人	洗濯
5	菊池「笹乃家」前の築地井手にて水遊び	隈府	1956年	井手, 人	遊び
6	東正観寺「丁字屋前」の築地井手で水泳	隈府	1956年	井手, 人	遊び
7	東正観寺の丁字屋前の築地井手と看板	隈府	1956年	井手, 人	
8	東正観寺の築地井手	隈府	1961年	井手	
9	栄町の築地井手	隈府	1968年	井手	
10	横井手端の分水路	隈府	1980年頃	井手	
11	泗水の高江鉄橋(合志川)を渡る菊池電車	泗水	1975年頃	川, 鉄橋, 電車	
12	昭和61年 菊池川を渡る菊池電車	広瀬	1986年	川, 鉄橋, 電車	
13	菰入橋の上にて	菰入	1940年代	川, 橋, 人	
14	加茂川小学校の水泳大会	菰入	1950年代	川, 橋, 人	水泳大会
15	加茂川小学校の水泳大会	菰入	1950年代	川, 橋, 人	水泳大会
16	迫間川における祭事	玉祥寺	1950年代	川, 人	祭事
17	迫間川における川開き	玉祥寺	1950年代	川, 人	神事

c) 風景の変化に関する分析

収集した 17 枚の写真について、同位置における現在の写真を撮影し、風景の変化について分析した。その結果、①井手のある風景、②川と電車の風景、③川での集団行動の風景の3種類の風景に関して、以下のことが明らかになった。

①「井手のある風景」: 表-4 の 4 番, 5 番, 6 番, 9 番は、洗濯や水遊びなどの井手における日常的な活動風景である。1950年代の半ばから、隈府地区における日常的な水辺の活動は衰退したと言われる。その原因として1954年に隈府に温泉が湧き出たことを指摘する人が多い。温泉が掘られて隈府には温泉旅館が増え、まちは観光客で賑わうようになったが、温泉の排水が井手に流され、井手の水が汚染されているという認識が地域住民に広まり、また悪臭を理由に、井手における日常的な活動は徐々に衰退していったと言われている。図-5 に 5 番の古写真と同位置における現在の写真を載せる。

1960年代に入ると自家用車が普及し、車道の拡張工事

が行われた。隈府における道路拡張工事に伴い、井手が狭められたり、蓋がけが行われた。表4の2番、3番、7番、8番の比較により、井手の幅が狭くなったことが分かる。さらに1972年になると、車幅拡張工事に加え、悪臭を理由に隈府の井手に蓋がされた。このように隈府では、温泉観光地としての発展と車社会の発達により井手に蓋がかけられ、人々を物理的かつ心理的に水辺から遠ざけてしまったことが分かった。

②「川と電車の風景」：表4の11番、12番は、電車と菊池川と一緒に写っている古写真である。1985年までは、熊本市と菊池市を結ぶ熊本電鉄（旧菊池電鉄）が運行されていた。しかし1986年2月に、途中の御代志～菊池間の運行が廃止されてしまった。熊本電鉄はその理由を、車社会の発達やバス路線の発達によるものと述べた²⁴。図6に、12番の古写真と同位置における現在の写真を載せる。

③「川での集団行動の風景」：表4の14番～16番は、川で行われていた集団行動の風景である。1960年代頃までは、菊池川支流迫間川の上流部に位置する隈府小学校や、菊池川本流の中流部に位置する加茂川小学校では、毎年川で水泳大会が行われていた。しかし1960年代から徐々に菊池市の小学校にプールが設立され、川で水泳を行う必要がなくなった。その結果、水辺に皆が集うことはなくなった。図7として、15番と同位置の現在の写真を載せた。

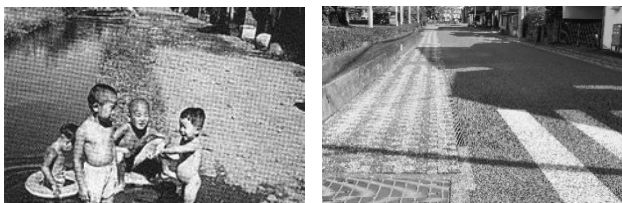


図-5 5番 1956年と現在の同位置における写真



図-6 12番 1950年代と現在の同位置における写真

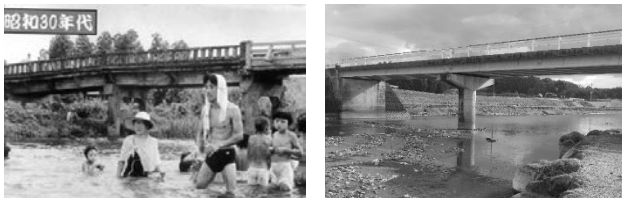


図-7 15番 1950年代と現在の同位置における写真

(3) 思い出に残っている水辺の風景の分析

インタビュー調査の間3「一番思い出に残っている水辺の風景について」の回答を分析することで、地域住民の思い出の水辺の風景を明らかにした。

以下に、調査結果および分析結果を示した。図-8, 9に重味地区と玉祥寺地区での調査の風景を示した。

全ての地区において、地域住民は思い出の風景として日常的な川の様子を思い浮かべていた。中でも、α. 重味地区やγ. 隈府地区では皆、川遊びの風景について話していたが、β. 玉祥寺地区では学校の登下校時に見る水辺の風景についても話しておられた。またσ. 七城町菰入地区は、災害時の様子についても話しておられた。同地区が昔から河川氾濫が頻発する地域であることがうかがわれた。人々の思い出に残っている水辺の風景は、各地域の暮らし方と密接に関係していると考察できた。



図-8 重味地区の調査



図-9 玉祥寺地区の調査

4. 菊池市の川遊びに関する分析

本章では、4地区で行ったインタビュー調査に基づき、川遊びの体験内容と空間条件を把握し、菊池市における川遊びの変遷とその変化要因について分析した。

(1) 4地区の川遊びに関する調査結果

表5に、インタビュー調査の間1「子どもの頃に行った川遊び」に関して、場所と内容の2項目を整理した。

α. 重味地区では2kmほど南にある菊池川本流や、3kmほど南東にある産さん滝、千畳河原を遊び場としていたことが分かった。また遊びの内容は、魚とりや飛び込みなど13種類ほどが挙げられた。

β. 玉祥寺地区では、すぐそばを流れる菊池川支流迫間川を遊び場にしていたことが分かった。遊びの内容は、飛び込みや、かつて小学校主催で毎年行われていた水泳大会など、11種類の遊びについて聞くことができた。

γ. 隈府地区でも、β地区と同様に迫間川を遊び場にしてはいたが、住んでいる地区によって遊ぶエリアが決められていたことが分かった。また遊びの内容は、β地区と同様に水泳大会の話で盛り上がり、全部で6種類の遊びの話聞くことができた。

σ. 七城町菰入地区では、遊び場について60歳以上の対象者らは、住んでいた家の近くの川で遊んでいたと述べたのに対して、σ9(48)は、水門付近のみで遊んでいたと述べ、遊び場が時代により変化したことが分かった。遊びの内容は、飛び込みや魚とり、浮草遊びなど9種類の話聞くことができた。浮草遊びに関しては、他の3地区では見られない遊びであった。

表-5 4地区における川遊びの遊び場と遊び内容の特徴

地区	対象者	遊び場に関するコメント	遊びの内容に関するコメント
α 重味	α1(83)	「豊潤橋の下に長淵であるもんね。そこあたりを中心にねいつも泳ぎに行きよった。」	「菊池川に魚をとりに潜る。天然のウナギもとりによったな。」「石投げでけんかしてた。」「誰が一番長くもぐっとるかだけは、競いよったな。」
	α2(78)	「産さん滝の方さん、魚とって、晩のおかず。」「(いつも遊ぶのは)菊池川。」	「その時代は、魚はサバくらいしか売りにきよらんだっけけん、魚とって、晩のおかず。食べるとはコヒナかタニシか川魚くらい。ゆずのとげ使って食べよった。」「石の上から押されよったけん。」「泳げ」というて。」
	α3(71)	「(千量河原に)夏休み一回ぐらいは連れて行きよんなったな。いつもは川。」	
	α4(65)	「私たち時は、その長淵ってか、そこで(遊んでいた)もう、毎日ですね。」	「コヒナをとりによった。」
	α5(60)	「(いつも遊ぶのは)菊池川ですね。」	「川の岸のところに、クミの木があつたりするんですよ。クミの遊びをしてました。」「めだかすくって遊んでもいました。」
	α6(58)	「俺も菊池川のほうが多かった。あと、産さん滝に行って、ジャンプしよった。古川兵頭井手で泳いだことはあつたですよ。」	「魚つきはしよった。矛で。」「コヒナ食べよった。いっちょいっちょつまようじで刺してから。」
	α7(43)	「カニとかタニシをとったりとか、家の近くで。小学校の近くの川(沢)で泳いだりはしていましたね。兵頭井手。」	「カニとかタニシをとったりとか、家の近くで。小学校の近くの川(沢)で泳いだりはしていましたね。兵頭井手。」
	α8(36)	「あんまり川には行かなかつたですね。泳ぎたい時は学校(プール)。千量河原は行ってた。」	「千量河原は行ってた(泳ぎ、飛び込み)。」
β 玉祥寺	β1(86)	「水泳大会ね、その橋の上でね。向こう側から綱引っ張ってね。」「その橋から(夜)飛び込みよった。」	「水泳大会ね、その橋の上でね。向こう側から綱引っ張ってね。」「私は潜りの名人だったんですよ。あと、追いかけて。」「堰の下はね、水が少ないのよ。そこで魚をとりによった。」
	β2(81)	「全部ここ(玉祥寺橋の上流)で水泳大会があつたの。」「堰があるから堰のところは流れがあるので、結構遊んでましたね。」	「めだかをすくってた。」「カニもとつた。」「ニナがいっぱいおつたから、それをとげのあるミカンで取って食べる。」「河童のきやわながれていうて、浮いて流れよつたのよ。」
	β3(69)	「まだ、学校とかプールがなかったからここ(迫間川)で泳いでいたんですよ。」「水泳大会もあつた。」「橋から飛び込んでた。」	「孟宗竹で編んだいかだで遊んでましたね。」「ニナは食べていたよ。」「どろ団子も作っていたよ。」
	β4(39)	「橋からは飛び込まん(飛び込まない)ですね。木のつるをターザンみたいにして深い所に飛び込んでました。」	「魚とかカニはとっていましたよ。」
γ 隈府	γ1(85)	「(遊んでいたのは)その玉祥寺の迫間川ですね。」「やっぱり地域の近いところが、自分たちの暗黙のうちの(遊び場)。」	「玉祥寺橋の欄干に上がって、それからよく飛び込みよつて。」「水泳大会のありよつた。」「あとは魚とるか泳ぐか、追いかけて潜ったりして。」「私らの頃は、身一つやったけんあ。」
	γ2(71)	γ2「上町、中町、下町っていうのは、泳ぐところがちゃんと決まっとつたですもんね。(一同):そうですね。」	「水泳大会のありよつたですもんね。」「魚とりが多かつたですね。」
	γ3(70)	γ2「上町、中町、下町っていうのは、泳ぐところがちゃんと決まっとつたですもんね。(一同):そうですね。」	「だけん木の上から飛び降りてから、飛び込みよつたですね。」「隈中プールで言ってますね(水泳大会をしていた)。」
	γ4(68)	γ2「上町、中町、下町っていうのは、泳ぐところがちゃんと決まっとつたですもんね。(一同):そうですね。」	「線ばはってですね(水泳大会をしていた)。」「どろ団子を作っていましたね。」「タイヤのチューブは浮き輪代わりにしよつたです。」
	γ5(54)	γ2「上町、中町、下町っていうのは、泳ぐところがちゃんと決まっとつたですもんね。(一同):そうですね。」	「どろ団子作りしてましたね。」「小学校、ラジオ体操があつて、夏休みは、一回家に帰ってご飯食べてすぐ川に行っていました。泳ぎに。」
σ 七城町菰入	σ1(85)		「ウナギを竹の仕掛けでとつた。多か時は、4匹も5匹も一人でとりによつた。」「川をはさんで、石ころを投げ合っていた。」
	σ2(83)	「欄干から飛びよつた。」「横さん縄ばはって(水泳大会)。」	「欄干から飛びよつた。」
	σ3(82)	「学校の水泳大会が、このあたりの川で水泳大会がありよつた。」	「学校の水泳大会が、このあたりの川で水泳大会がありよつた。」
	σ4(76)		「ホテアオイっていう浮草を集めてその上に乗って相撲しよつた。」
	σ5(67)		「ホテアオイっていう浮草を集めてその上に乗って相撲しよつた。」
	σ6(66)	「普段の泳ぐ場所はここですね。(地図記入)今ここにある菰入橋が、普段泳ぐ場所。この橋のすぐ上。と、その橋の欄干から下まで飛び込む。」	「その橋の欄干から下まで飛び込む。」
	σ7(63)	「昔はね、鴨川で言うてから、みんなここで遊びよつた(地図記入)。」	「ハエというて、このくらいの魚がおつて(それをとっていた)。」
	σ8(60)	「俺たちは、この水門から。菰入水門から飛び込みよつた。昔は早かつたけん、小学校3年くらいから飛び込みよつた。」	「昔はね、魚がいっぱいおつたけんね、ほこつき。潜つてね。こぎゃんふとかとのれよつた。」
	σ9(48)	「そっち(菰入橋)は浅いので、そこ(水門)からは飛び込んでました。」	「そこ(水門)からは飛び込んでました。釣りもしていました。」

(2) 川遊びの変遷に関する分析

表-5で整理したデータから、4地区における三世代の遊び場と遊びの種類の変遷を、玉祥寺地区について図-10に、七城町菰入地区について図-11に示した。

b) 玉祥寺地区

玉祥寺地区において遊び場に大きな変化があつたのは、β4(39)が子ども時代を過ごした1980年代であった。1940年代に川遊びをしていたβ2(81)は「ここ(玉祥寺橋上流)で水泳大会があつた」と述べ、他の世代のインタビューも同じ場所に綱を張り、川プールとして使

っていたことを話した。また川への飛び込みの場所についても、β3(69)の時代までは主に玉祥寺橋から飛び込みをしていたのに対し、β4(39)は「橋からは飛び込まん(飛び込まない)ですね。木のつるをターザンみたいにして深い所に飛び込んでました」と橋からは飛ばなくなったと述べた。

以上より、玉祥寺地区の遊び場については、β3(69)の時代までは玉祥寺橋を中心に様々な川遊びを行っていたのに対し、β4(39)の時代には遊び場が橋より上流へと移動したことが分かった。また、川遊びの内容については、β1(86)、β2(81)の時代からβ3(69)の時代に向け

β1(86), β2(81)



β3(69)



β4(39)



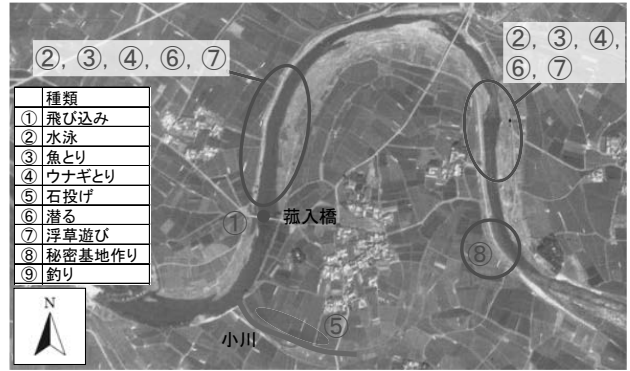
図-10 玉祥寺地区における川遊びの変遷

て大きな変化はみられなかったが、いかだ作りやだるま団子作りなど、道具を使った遊びが増えたことが分かった。またβ4(39)の時代になると、遊びの種類が9種類から5種類に減っていることが分かった。

b) 七城町菰入地区

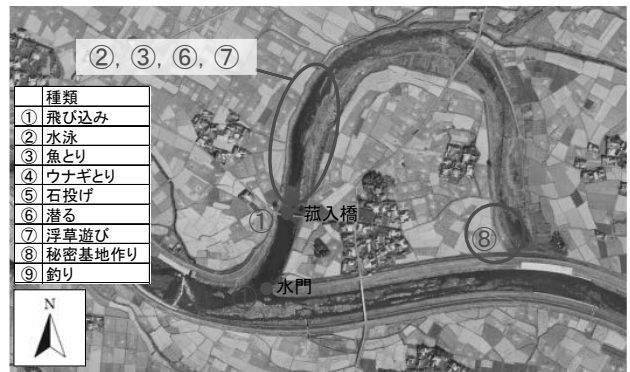
七城町新町・菰入地区では、σ1(85), σ2(83),

σ1(85), σ2(83), σ3(82), σ4(76)



σ5(67), σ6(66),

σ7(63), σ8(60)



σ9(48)

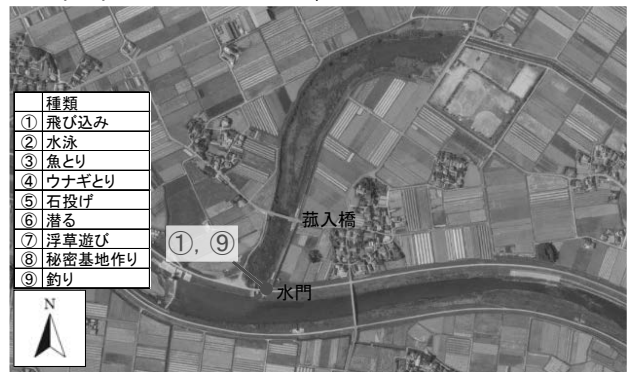


図-11 七城町菰入地区における川遊びの変遷

σ3(82), σ4(76)の時代から、σ5(67), σ6(66), σ7(63), σ8(60)の時代間に、河川改修により河川の形が変わった東側のエリアと、かつて小川があった南側のエリアにおける遊びがなくなったことが分かった。またσ5(67), σ6(66), σ7(63), σ8(60)の時代からσ9(48)の時代の間には、遊び場に大きな変化が見られた。具体的には、飛び込みを行っていた場所についてσ2(83)は「欄干から飛びよった」と述べた。またσ6(66)は「その橋の欄干から下まで飛び込む」と述べた。一方σ9(48)は「そっち(菰入橋)は浅いので、そこ(水門)からは飛び込んでました」と、σ9(48)の時代になると、水門からしか飛び込んでいなかったと話した。

遊びの内容については、σ8(60)の時代までは大きな変化はみられないが、σ9(48)の時代になると種類が大

表-6 4地区における川遊びの変化

	α. 重味地区		β. 玉祥寺地区		γ. 隈府地区		δ. 七城町流入地区	
	遊び場	遊びの内容	遊び場	遊びの内容	遊び場	遊びの内容	遊び場	遊びの内容
1940年代頃	2km程離れた菊池川が遊び場	・生活の為に魚をとる ・植物でニナを食す ・種類:9	玉祥寺橋を中心とした範囲が遊び場	・体を使った遊びが多い ・種類:9	地区内で遊ぶエリアが分けられていた	・体を使った遊びが多い ・種類:5	・集落近くの川が遊び場 ・小川を挟んで遊ぶ	種類:8
変化したこと 1960年代頃	変化なし 2km程離れた菊池川が遊び場	目的、方法の変化 ・つまようじてニナを食す ・種類:10	変化なし 玉祥寺橋を中心とした範囲が遊び場	種類の変化 ・道具を用いた遊び出現(いかだ, だる団子) ・種類:9	変化なし 地区内で遊ぶエリアが分けられていた	種類の変化 ・道具を用いた遊び出現(タイヤ, だる団子) ・種類:6	大きな変化なし 集落近くの川が遊び場	大きな変化なし 種類:6
変化したこと 1980年代頃	メインの遊び場の変化 ・普段は近所の沢や井手遊び場 ・たまに滝へ遊びに行く	種類の減少 種類:5	メインの遊び場の変化 玉祥寺橋よりも上流が遊び場	種類の減少 種類:5	変化なし 地区内で遊ぶエリアが分けられていた	種類の減少 種類:2	遊び場の変化、減少 水門付近が遊び場	種類の減少 種類:2

幅に減少し、σ9(48)は「小学校の時は、川に行こうとかいう考えが無かったですね」と川遊びはしなかったことを話した。

(3) 川遊びの変化要因に関する考察

遊び場と遊びの内容の変化要因について考察する。2節より、4地区における川遊びは、[1] 1940年代から1960年代の間と [2] 1960年代から1980年代の間において変化していたことが分かった。表-6に4地区における川遊びの変化をまとめた。

[1] 1940年代から1960年代にかけては、二つの変化要因があったことが分かった。一つ目は、戦後人々の生活が落ち着き、食料や物資が豊かになったことなどによる「暮らしの変化」である。二つ目は、河川改修により河川形状や水量が減ったことによる変化であった。

[2] 1960年代から1980年代にかけても、二つの変化要因があった。一つ目は、1960年代以降の「小学校プールの設立」であり、二つ目は前時代と同じく河川改修による変化であった。

5. 川遊びに関するローカルルールの分析

本章では、4地区における川遊びに関するインタビュー調査に基づき、川遊びに関するローカルルールの分析を行った。比較分析を行った後、4地区の水辺に共通するローカルルールの変遷要因を明らかにした。さらに、地域住民の水辺に対する意識について考察した。

(1) 川遊びに関するローカルルールの抽出

表-7に、インタビュー調査により抽出された4地区における川遊びに関するローカルルールを整理した。なおインタビューα4, σ2, σ4, σ5, σ6, σ7からは、ローカルルールに関するコメントは得られなかった。

4地区全体で、①泳ぎを覚えた場所や教えてくれた人などに関するルール、②川遊びをする際に保護者が子どもを見守ることに関するルール、③川遊びをする際の遊び場のエリア分けに関するルール、④川の中にある淵に関する教え、⑤川遊びをする際の服装などの格好について、⑥川遊びに対する小学校での教え、が抽出された。

(2) 4地区におけるローカルルールの比較分析

4地区におけるローカルルールを比較分析した。

a) 空間に関するローカルルールの分析

α.重味地区、β.玉祥寺地区、γ.隈府地区の3地区で、「淵に関する規範」に関するコメントが得られた。この3地区の水辺には淵が存在する。淵とは、川が大きく曲がっている角の部分の部分を指し、流れがよどみ急激に流れが速くなるため、溺れる危険があるとされる。α.重味地区では、主な遊び場が菊池川本流の最上流部であった1960年代までは、淵をはじめとするその他流れが速い場所は、危険であるから近づかないと言われていた。また迫間川上流の右岸左岸に位置するβ.玉祥寺地区、γ.隈府地区では、1980年代まで淵は危ないから近づかないと言われていた。さらに「泳ぎの覚え方」に関して、最上流部に位置するα.重味地区のα5(60)は「場所があるんですよ。泳ぎやすいような緩く流れる場所が。だからそこで覚えなさい、じゃないけどみんなそこで練習したりしてた」と、自然と小さい子どもは、川の中の安全な場所で泳ぐような仕組みがあったことを話した。

以上より、3地区においては地域の水辺の危ない箇所や安全な箇所に関する知識が共有されており、水辺空間に関する共通認識があったことが分かった。

b) 左右岸で違いがみられたローカルルールの分析

迫間川の対岸に位置するβ.玉祥寺地区とγ.隈府地区には、「遊び場のエリア分け」の規範の有無に違いがあった。右岸側のβ.玉祥寺地区には、この規範は存在しないが、左岸側のγ.隈府地区では、1940年代~1980年代に至るまでこの規範が継承されていたことが分かった。これらはβ.玉祥寺地区は川に対して1つのコミュニティしかないのに対し、γ.隈府地区は中心市街地であり、川に沿うように三つのコミュニティが存在していることに起因していると考えられる。

c) 4地区に共通するローカルルールの分析

4地区全てに共通する規範が2つ存在した。

一つ目は、「泳ぎの覚え方」についてである。1940年代は、4地区とも泳ぎを親や学校の先生から教えてもらうことはなく、川で上級生から学んでいたことが分かった。そして、どの地区も教えてもらうというよりは、上級生が泳いでいる姿を見て、試行錯誤しながら自力で覚えた。1960年代でもさほど変わらず、子どもたちの中で

表-7 4地区における川遊びに関するローカルルール

地区	対象者	泳ぎの覚え方	見守りの規範	遊び場所のエリア分け	淵に関する規範	川遊び時の服装	小学校での教え	
α 重味	α 1(83)	α 2(78)「おいどんの場合は、石の上から押されよったけん、『泳げ』っていうから、先輩から、そして、おぼくれよと、先輩が助けに来る。」	「親が監視したことはなかったもん、放任だった。先輩たちの目配りたいな。そして、今んごと一人一人の生活じゃなく、まとまっとった。」					
	α 2(78)	α 1(83)「うんうん、死んだものおらんやっつもんね。」	α 2(78)「やっぱ、先輩からこなされてやっば、な、監視より、先輩のおったほうが自分たちも安心だったもんね。」 α 3(71)「うんうん」	α 2(78)「やっぱ場所のちごうとったな。」 α 3(71)「うんうん」				
	α 3(71)							
	α 5(60)	α 5(60)「昔は、子どもの多かったでしょ。だから年齢別で、ちゃんどリーダーのおんなさってからね。」 α 6(58)「うんうん。」 α 5(60)「場所があるですよ、泳ぎやすいような緩く流れる場所が、だから、そこで覚えなさいじゃないけどみんなそこで練習したりしてたんでそこで泳いでた。」	α 5(60)「先輩たちが小さい子たちを連れて行って、小さい子たちはここで泳げって命令されたよ。α 6(58)「ガキ大将んごたつのおったもんね。」 α 5(60)「学校にプールができてからは、ほとんど夏休みはプールで遊びなさいだった。できるまでは地域で親御さんが監視、当番決めて川に行ってた。」	「道園はここで、伊倉は違う。」 「いだ線から下のほうが篠倉の人が遊ぶ場所。」 α 6(58)「うんうん」	「私たちのところでは、そのいだ淵っていう、淵になっているんで、そこは低学年は行っちゃだめって言われよった。約束があった。」			
	α 6(58)							
	α 7(43)	「菊池川では、近くの沢や井手で遊んでいた。」						
	α 8(36)	「あんまり(川に)行かなかったですね、泳ぎたいときは学校。」	「小学校高学年くらい、自分たちで行けるようになってからしか川には行ってないですね。」					
β 玉祥寺	β 1(86)		「(見守るような)そういうのは、昔はなかったですね。子ども自分で、学校から帰ったら、カバンをバーツと投げよって、すぐ。」			「よどみになってる場所があった、そこは行っちゃいけないって言われよった。」	「男はね、へこって言うて、真っ白いを買ってきてね、自分でね、肩にかけて、それが男性の水着だった。」	
	β 2(81)	「親が教えることはない、常に川で遊んでるから、自然に覚えてる。」親が手をひっぱって泳がせようってことはなかった。」	「昔はね、共助、お互いに助け合うわけだからね、別に必要がないよ。みんなが助け合うでしょ、『あれおかしい』ってなかったらね。」		「ひめじょ淵でいうかね、そこが深くなってね、水を止めてるから深いですよ。流れがあるから、そこで泳いではいけないうってことは、聞いていました。」	「昔はね、水着がなかったのよ。だから、女性はね、シミーズ(下着)っていうのに、ブルマ。」		
	β 3(69)	「自分たちで競っていた。」	「親が交代で見張り来たよったけんね、夏休みとかは、この下の方に、監視役がおった。子どもたちが水遊びするね、この玉祥寺橋の下にも監視役がおったわけ。」		「淵は悪魔が出るって言われていたよ。」	「小学校1、2年まではへこしとったか。3年生ん頃から水着に代わった。」	「小学校では特に何も言われていないよ。」	
	β 4(39)	「はじめは学校のプールですね。」	「大体うちのおふくろが自営業だったもんで、昼間同級生がみんなきてたら、(親が見守っていた、じゃないと遊んじゃダメだった。」		「淵は危なくて言われよったですね。」	「水着でしたね。」	「言われてました。僕らが子どもの頃から行くって。」	
γ 隈府	γ 1(85)	「上級生が、子どもを連れて、泳ぎを教えたりなんかを自然として、また後輩をっていうような、非常にいい時代だったですね。」	「全くなかった。」親は、もう全然、やっぱ上級生が多少は、近所の人がやっばりたい川はわかりますから、子どもも多かったしね。」	γ 2(71)「上町、中町、下町っていうのは、泳ぐところがちゃんと決まっとったですもんね。(地図)」 一同「そうですね。」	「結局曲がり角は、淵でいうのは深くて危ないからあんまり泳ぐ人はいなかった。」	「女子は長いのをしとんたっです。それと、私たちはへこで、自分でこうして回しながら、男の水泳パンツなんてのは、なかったから。」		
	γ 2(71)	γ 2(71)「やっばり見様見真似中かね。」 γ 4(68)「兄弟がおったりとかいろいろありましたもんでね、兄弟の多かったですからね、昔は。」 γ 3(70)「そういうのもやっば先輩たちが教えてくれよったですもんね、自然にですね。」	γ 2(71)「俺たちん頃はあったな。」 γ 4(68)「昔は、子どもが泳ぐときは、父兄たちが監視っていうか交替で行きよったもんですから。」 γ 4(68)「そして、さっき言ったように、保護者の方が結局監視があるんですね、事故が起こらないかのような。」	γ 1(85)「まんだが中町の縄張りだもんね。」 γ 2(71)「中町は、『なんしに来たか』っていう顔ばしよったもんね。」 γ 1(85)「やっばり地域の近いところが、自分たちの暗黙のうちの。」	γ 2(71)「どんだん(淵の部分)は、流れのはやかったたい、そして深うなとるやろ。」 γ 3(70)「うんうん。」 γ 2(71)「淵でいうのがついとっとは、なんかがあるけんそこでは泳ぐなちゅうもんね。」	γ 2(71)「俺たちの細か頃も、へこ巻きよったかもしれんですな。」 γ 4(68)「いやあ、俺たちん頃は水泳パンツでしよ。」 γ 2(71)「へこは相撲ん時かな。」 γ 2(71)「おいどんらは、巻けんですもんね。」		
	γ 3(70)							
	γ 4(68)							
	γ 5(54)	筆者「γ 5さんも川で覚えられましたか？」 γ 5(54)「そうですね、プールはあったけど。」						
σ 七城町菰入	σ 1(85)	「上の人たちが泳ぐから、真似ばしよった。たいがい泳ぎました、ここの人たちはみんな子どもん時から水泳は上手い。」	「そぎゃんことはなかったですね、親はね、私たちの時代は、子どもを見る機会のなかったです。」					
	σ 3(82)		「見張りはなかったです。」				「小学校では特に何も言われんかったなあ。」	
	σ 8(60)	「泳げなかったら川で遊べないから、おのずと自分たちで泳ぐ練習を。」	「夏休みなんかは川で泳いだつたから、川にプール監視員って、親が交代で、菊池川で監視小屋作ってね。」				「あってましたね、十分注意せいで言いながら、あそこだめよって。」	
	σ 9(48)	「小学校の間、あんまり川で泳ぐというあれ(考え)がなかったです、もうプールがあったから。(覚えたのは)学校です。」	「小学生は、私泳いだことなかったです。ある程度体が大きくなってからじゃないと、川では危ないですから。」					

	変化したこと	変わらないこと
3章	水辺における日常的な風景 ・井手のある風景 ・川と電車の風景 ・川での集団行動の風景 <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; margin-left: 10px;"> ← 変化要因 ・まちづくりの発展に伴う水質環境の変化(1954年～) ・人々の交通手段の変化(1960年代～) ・小学校プールの設立(1960年代～) </div>	水辺に対する愛着 水辺がふるさとであるという認識
4章	川遊び活動 ・遊びの方法や目的が変化 ・遊び場や遊びの種類が変化・減少 ・人々が川で泳ぐ機会が徐々に減少 <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; margin-left: 10px;"> ← 変化要因 ・暮らしの変化(1940年代～) ・河川改修による河川の変化 ・小学校プールの設立(1960年代～) </div>	水辺が日常的な遊び場であること
5章	・「泳ぎの覚え方」が3/4地区で変化(1960年代～1980年代間) ・「見守りの規範」が全地区で変化(1940年代以降徐々に変化) <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; margin-left: 10px;"> ← 変化要因 ・小学校プールの設立(1940年代～) </div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; margin-left: 10px;"> ← 変化要因 ・川に対する危機意識の変化(1940年代～) </div>	水辺に関するローカルルールの存在

図-12 菊池市の水辺における地域住民の活動と認識の変化

競い合いながら泳ぎを覚えていったことが分かった。1980年代以降は、泳ぎを覚えた場所は小学校のプールだというコメントが挙がった。

二つ目は「見守りの規範」である。1940年代は4地区全てにおいて親の見張りはなかった。この時代は今より子どもの数が多かったため、自然に上級生が下級生の面倒をみるシステムが各地区にできていた。1960年代では、4地区すべてにおいて夏休みになると、親が子どもの川遊びを見張っていたというコメントが得られた。うち3地域では、監視小屋もあったそうだ。1980年代以降は「親が見張りをしていないと小さい子どもは川遊びをしてはいけない」と言われるようになった。また「小学校高学年以上になり、自分の身を守るようになってからしか川で遊んだことがない」というコメントも得られた。

(3) まとめ

4地区における川遊びに関するローカルルールについて分析を行うことで、地域住民の水辺に対する認識について考察した(図-12)。

1940年代～1980年代にいて4地区共通のローカルルールとして「泳ぎの覚え方」と「見守りの規範」が存在した。それらの変遷要因として「泳ぎの覚え方」は、1960年代～1980年代の間に34地区で大きな変化が見られ、その変化には「小学校プールの設立」が関係していると考えられる。また「見守りの規範」に関しては、1940年代～1980年代にかけて徐々に変化しており、「川に対する危機意識の変化」が見られた。

6. おわりに

(1) 結論

研究の結果、以下の三つのことが明らかになった。

- ①今の子どもたちの親世代である30歳代までの地域住民は、水辺に対して愛着を持ち続けていること
 - ②時代とともに、地域住民の水辺に対する危機意識が変化してきたこと
 - ③30歳代以上地域住民には、地域の水辺に関する魅力や知識を上世代の人々から伝え継がれてきたこと
- 1980年代まで、水辺に暮らす子どもたちは、川遊びという何気ない日々の活動を通して、地域の水辺の魅力や危険な場所を見つけ、コミュニティの中で共有し合っていた。しかし現代では、小学校や親から「良い子は川で遊ばない」と教えられるようになり、そもそも川に近づくかなくなった。その結果、水辺の魅力に触れる機会もなく、愛着が育まれにくくなり、水辺の危険性についても継承されなくなった。これは、今日の水辺の賑わい減少の大きな要因の一つであると考えられる。

この課題を解決するには、地域住民が自ら地域の水辺の魅力を発見し、次世代に受け継ぎたいと思うことが重要であると考えられる。そのため、今後かわまちづくり活動などを行っていく際に、行政や企業、地域住民らが一体となり、地域の水辺の魅力を再発見、再確認し続けられるような仕組み作りを行っていくことが重要である。

謝辞：本研究は多くの皆様にその成果を負っており、記して感謝の意を表す。菊池市役所、菊池市立中央図書館の皆様には、調査や資料・写真の提供にご協力頂きました。4地区の市民の皆様にはインタビュー調査にご協力頂きました。皆様、ありがとうございました。

REFERENCES

- 1) 大熊孝：技術にも自治がある，社団法人農山漁村文化協会，2004。[Okuma, T.: *Technology also has autonomy*, Rural Culture Association, 2004.]

- 2) 宇井えりか・畔柳昭雄：水辺環境の変遷からみた人間と自然との係わりに関する研究，日本建築学会計画系論文集，第 540 号，pp.315-322，2001. [Ui, E. and Kuroyanagi, A.: *Research on the relationship between humans and nature from the perspective of changes in riparian environments*, pp. 315-322, No.540, Proceedings of the Architectural Society of Japan, 2001.]
- 3) 嶽山洋志，客野尚志，赤澤宏樹，藤本真里，宮崎ひろ志，田原直樹，中瀬勲：兵庫県における水辺での遊びの変遷について—武庫川上流域の三田市「曲がり」での調査分析—，人と自然，No.14，pp.77-82，2003. [Takeyama, H., Kyakuno, T., Akayaza, H., Fujimoto, M., Miyazaki, H., Tahara, N., and Nakase, I.: *The Transition of Waterfront Play in Hyogo Prefecture*, pp.77-82, No.14, People and Nature, 2003.]
- 4) 和田安彦，道奥康治，和田有朗：住民の暮らしからみた水辺環境の評価，土木学会論文集，No.776，pp.83-95，2004. [Wada, Y., Michioku, K. and Wada, A.: *Evaluation of the riparian environment from the viewpoint of residents' daily life*, pp.83-95, No.776, Journal of JSCE, 2004.]
- 5) 呉宣児：語りからみる原風景心理学からのアプローチ，萌文社，2001. [Oh, S, K.: *Approaches from Original Landscape Psychology from Narrative*, Houbun-sha, 2001.]
- 6) 佐竹俊之，上甫木昭春：人々が地域の水辺に対して抱く愛着に関する研究，ランドスケープ研究，70(5)，pp.663-668，2007. [Satake, T. and Kamihogi, M.: *Research on people's attachment to the local waterfront*, pp.663-668, 70(5), Landscape Studies, 2007.]
- 7) 仙田満：原風景によるあそび空間の特性に関する研究—大人の記憶しているあそび空間の調査研究—，日本建築学会論文集，第 322 号，1982. [Senda, M.: *Research on the characteristics of play space by archetype landscape*, No.322, Proceedings of the Architectural Society of Japan, 1982.]
- 8) 中嶋伸恵，田中尚人，秋山孝正：水辺空間を基盤とした地域コミュニティの形成に関する研究，土木学会論文集，Vol64，No.2，pp.168-178，2008. [Nakajima, N., Tanaka, N. and Akiyama, T.: *Research on the formation of local communities based on waterfront spaces*, Vol64, No.2, pp.168-178, Journal of JSCE, 2008.]
- 9) 菊池市 HP：https://www.city.kikuchi.lg.jp/
- 10) 菊池市：菊池市史上巻，1982.3. [Kikuchi City History, Vol.1, Kikuchi city, 1982.]
- 11) 菊池市：菊池市史下巻，1986.7. [Kikuchi City History, Vol.2, Kikuchi city, 1986.]
- 12) 建設省九州地方整備局菊池川工事事務所：五十年史，1991.1. [history of the 50-year period, Kikuchi River Public Works Office, Kyushu Local Planning Bureau, Ministry of Construction, 1991.]
- 13) 国土交通省九州地方整備局菊池川工事事務所：六十年史【五十年史・追補版】平成3年度～平成12年度，2001.3. [history of the 60-year period, Kikuchi River Public Works Office, Kyushu Local Planning Bureau, Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism, 2001.]
- 14) 国土交通省九州地方整備局菊池川河川事務所：竜門ダムの軌跡，2018.6. [Tracks of Ryumon Dam, Kikuchi River Public Works Office, Kyushu Local Planning Bureau, Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism, 2018.]
- 15) 国土交通省九州地方整備局菊池川河川事務所 HP：http://www.qsr.mlit.go.jp/kikuti/html/bousai03.html
- 16) 熊本県町村会熊本県市町村総合事務所 HP：http://www.c-kumamoto.gr.jp/
- 17) 日本遺産 HP：https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/
- 18) 渡部陽介，横張真：行為と距離の観点からみた農村地域居住者が地域アイデンティティとして認識する景観の特性，ランドスケープ研究，73(5)，pp.643-646，2010. [Watanabe, Y. and Yokohari, M.: *Characteristics of landscape perceived as regional identity by rural dwellers from the perspective of action and distance*, pp.643-646, 73(5), Landscape Studies, 2010.]
- 19) 汐見昌子・笹谷康之：小中学校校歌にみる近江の風景イメージに関する研究，環境システム研究論文集，Vol.29，2001.11. [Shiomi, M. and Sasatani, Y.: *A Study on Images of Omi Landscape in School Songs of Elementary and Junior High Schools*, Vol.29, Journal of Environmental Systems Research, 2001.]
- 20) 菊池市立小中学校全 15 校 HP
- 21) 平岡直樹：天竜川沿川における新旧写真比較からみる景観の変容に関する研究，ランドスケープ研究 68(5)，2005. [Hiraoka, N.: *A Study on the Transformation of the Landscape along the Tenryu River through Comparison of Old and New Photographs*, 68(5), Landscape Studies, 2005.]
- 22) KIKUCHI DIGITAL ARCHIVES 菊池市と出会う：https://da.library-kikuchi.jp/
- 23) 七城町ふるさと写真集「ふるさと」，1999.3. [Furusatou, Shichijo-mach Furusato Photo Album, 1999.]
- 24) 熊本電鉄 HP：https://www.kumamotodentetsu.co.jp

(Received April 10, 2023)